
ブラックユーモアダンス

コンセント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックユーモアダンス

【Nコード】

N0390V

【作者名】

コンセント

【あらすじ】

神楽坂明日菜は帰り道に魔法使いに会う事になる。どんな運命になるのか。それはまだ混沌の中。それが……ドロヘドロ！

魔の1

クラスメートが魔法使いだった。

こんな冗談みたいな話、信じられるだろうか？

神楽坂明日菜は下校途中、何時も一緒に帰っている近衛木乃香が祖父の学園長に呼び出され、珍しく一人きりで道を歩いている、そんな時だった。

中学生になり、クラスにも大分慣れ始めたが普段あまり接点がないクラスメートを発見し、良い機会だから帰りを一緒にしようとしたのが間違이었다たのかもしれない。

明日菜は彼女に声をかけようとした、が。

彼女の異様な雰囲気により明日菜は一瞬戸惑った。

恐る恐る近付くとクラスの中ではあまり目立った印象は無い彼女はゴーグルの付いた目と鼻だけが隠れるマスクの様な物を装着していた。

何かヤバイモノを見てしまったかもしれない。

明日菜はどうしかと彼女から身を隠すように考えていると事は起こった。

彼女の口から黒い煙が出ている！

そして彼女の周りに黒い煙が立ち上り、その煙がみるみるうちに

ドアになつたのだ！

「え！？」

思わず声を出してしまった。

「神楽坂さん！？」

振り向いた彼女も驚いたようではらく2人は固まったまま無言だった。最初に動き始めたのは酷く狼狽するマスク姿の彼女だった。彼女は明日菜とドアを交互に見ながら開いたままだった口をきゅつと閉め明日菜の腕を引つ張った。

「ええ！？ ちょっとなにすんのっ」

「私と一緒に来て」

「はあ！？ はっ、もしかしてコレが噂の誘拐！？ たたた助けてー！！」

本気で身の危険を感じた明日菜はもちろん抵抗した。明日菜は自分でも少しばかり体力バカな自覚はあるため腕を振り切れる自信があった。

「……！ ちょっとだけど魔法を使うよ。大丈夫。害は無いから」

明日菜の力に驚いたのかそう言う彼女が口からあのドアを出現させた黒い煙をフツと明日菜に吹きかけた。

この煙が彼女の言う魔法なのだろう。

黒い煙は明日菜の半身を埋め尽くし瞬く間に消え去った。

「ゲホッ、ゲホッ、一体何なのよ……」

何も起きていない。ただ煙のせいか咳をしている程度だった。

「魔法が効いていない？ 神楽坂さん、アナタは……」『その生徒！ 動くな！』

突然第三者の声が後方から聞こえてきた。

すると彼女は苦い顔をして明日菜の腕ではなく手を優しく握り締めた。

「厄介な相手が来た。神楽坂さん、こんな事に巻き込んでゴメン。でも信じて、私はアナタの敵じゃない」

何が起こっているか分からない明日菜の手を彼女は半ば強引に引っ張つると魔法のドアのノブを回した。

ドアが開く隙間から眩しい光が明日菜を照らした。

「ようこそ、魔法使いの世界へ」

「アキラちゃん……！」

第1話でわかったこと。

1、明日菜は木乃香以外に帰ってくれる人がいない……。

2、魔法使いは怪しいマスク姿。

3、魔法使いは煙でどこでもドアもどきを作れる！

4、明日菜は誘拐を怖がるか弱い女の子。

5、でも思いつきり抵抗しちゃう。

6、アキラちゃんは魔法使い！

7、アキラの魔法は害は無いらしい……。

8、ドアの向こうは魔法使いの世界だった。

そして第2話でわかること。

それはまだ……混沌の中。それが……ドロヘドロ！

魔の2

「ようこそ、魔法使いの世界へ」

「アキラちゃん……！」

明日菜はマスク姿のクラスメート、大河内アキラに手を引かれたまま魔法使いの世界の地を踏んだのだった。

周りを見るとどこかの広場の様であるが歩く人々がみなそれぞれ違うマスクを身に付けていた。

マスクを付けた人はドアから出て来たアキラと明日菜を見て口々に「実力のヤツは自力で移動デキていいな」など羨む視線だけで特に驚いた様子は無かった。

つまり日常的に実力のある魔法使いとやらは突然ドアを黒い煙で出して瞬間移動紛いの事をやっているという事だ。

「私の家に来て。ここだと目立つ。」

「はあ」

ここまで来ると従うしか余地がない。何せ明日菜にとっていきなり「魔法使いの世界」というワケが分からない異境の地に足を踏み入れてしまったのだから。

明日菜はアキラに着いて行きながら周りを見回した。

特に普通の街と変わらないようだが街角に悪魔のような石像が立っていたり、よく見たらホウキもどきの機械に乗りながら黒い煙を

出して空を飛んでいる者もいる。

どうやらとんでもない所に来てしまった事を今更ながら後悔した。

「ここが私の家」

「立派な一軒家ね」

「……格差社会だからね。実力がある魔法使いは立派な家に住み、実力のない魔法使いはアパート暮らしさ」

私は親の七光りだけどね、とあまり良い顔をしないまま家に案内された。

アキラの部屋に案内されるとソファーに腰を下ろした。

「さて、どこから説明しよう」

そう言うときアキラは部屋にある冷蔵庫から飲み物をだしグラスに注ぎ始める。

そんなマイペースなアキラに明日菜は肩透かしを喰らったような気がした。

「この世にはね、精霊を操って魔法を出す魔法使いと煙を出す魔法使いがいるんだ。前者の方は覚えようとすれば誰でもなれる。けど、私みたいな煙を出す魔法使いは種族だね。隔離された場所で生きているんだ。」

マスクを外し、一息つくようにグラスを傾けるアキラは教室で見るといつも後ろで微笑んでいる顔とは程遠く疲れきったような顔をしていた。

「アキラちゃんは私達と違うの？ 見た目だって同じじゃない？」

「体の中に煙を出すための管があってね、頭の中にも私達の命の象徴である小さな悪魔がいる。普通の人間とは造りが違うよ」

頭の中に悪魔がいる。小さい悪魔が頭の中にいる想像をして少し滑稽に思えた。

「アキラちゃんは魔法使いなんですよ？ なんで麻帆良にいるの？」

「そうだね。確かに私は魔法使いだよ。でもね、私はこの世界がキライなんだ。だから麻帆良に移住したんだ。でもアツチの魔法使いはコツチの魔法使いの事をキライみたいだね。度々尾行されたり追われたりするんだ」

「じゃあ、さつきも……」

アキラが誰かに追われたのを思い出した明日菜は納得した。

「そう。学園長に許可は貰ってるんだけどね。ヤツらはそうもいかないみたい」

「ちよちよちよ待つて。じゃあ学園長も魔法使いってこと？」

「うん。ちなみにさっきのヤツらも魔法使いで先生をやっているみたいだよ」

目を丸くした明日菜は数年暮らしていた土地にファンタジーな人物が数十人以上も潜んでいた事が信じられなかった。

「私の学校一体どうなってるのよ……」

「え、神楽坂さんは魔法関係者じゃないの？」

「はぁ！？ 冗談よしてよ！」

「あ、あれ？ 確かにここまで魔法の事を知らないのは変だと思ったけど……」

「違うわよ！ 何でそう思ったのよ」

「神楽坂さんに魔法効かなかったんだ」

「え？ そうなの？」

「私達魔法使いはアッチの魔法使いと違って固有の魔法を持っているんだ。そしてごくまれに魔法が重複してかかっているとそれ以上魔法が効かない身体になることがある。つまり神楽坂さん、アナタは……」

「すでに何かの魔法にかかってるってこと？」

「そういうことになる。神楽坂さん、麻帆良に来る前の事、覚えてる？」

「わ、私は……」

「思い出せない。明日菜は懸命に自分の幼少の頃を思い出そうとした。しかし思い出せるのはせいぜい麻帆良に引っ越して来てからの出

来事のみだった。

「酷なようだけど、アナタには両親もいなかったハズだ。なぜ両親がいないか思い出せる？」

なぜ自分は両親がいないのか、なに自分には麻帆良に来る前の記憶が無いのか。

明日菜には分からなかった。

「分からない……、思い出せない……。何で、何で……」

「やっぱり。記憶を消すような魔法がかけられてるよ。もしかしたら神楽坂さんは昔コツチの魔法使いの世界に住んでいたのかもしれない」

明日菜はこの言葉に頭を抱えた。

私が魔法使いの世界に住んでた？ 笑えない。つまりは明日菜も魔法使いなのかもしれないと言われてるようなモンだったからだ。でも本当に魔法が効かなかったみたいだし記憶も無い。その可能性は十二分に有り得るのだ。

「……なんかアキラちゃん、ちょっと嬉しそうね」

話してる最中に明日菜は気がついたが、アキラは少し嬉しそうに喋っているのだ。

「うん。だってクラスメートがまさか私と同じ種族だったなんて嬉しいよ！ あ、モチロンいっしょに記憶を取り戻す方法も考えるよ！」

そんなアキラを明日菜は恨めしく思ったがアキラはちっとも気付く様子はなかった。

「まだ私が魔法使いだって決まったわけじゃ無いでしょーに……。って私記憶取り戻せるの!？」

取り戻せるなら取り戻したい明日菜は食い付いた。

「魔法の解除方法は3つ。かけた本人が解くか、かけた本人が死ぬか、魔法を解く力を持つ魔法使いが解除するか、だ」

死ぬという単語を聞いた明日菜はピクリと反応したが黙ったままだった。

反応した明日菜を気付かないフリをしてアキラは続けた。

「一番最後の方法はオススメしないね。まず見つからない。珍しい魔法だから。かけた本人を見つけ出そう。私にアテがある」

「アテ？」

「神楽坂さんの保護者、高畑先生。何か知ってるんじゃないかな？」

両親のいない明日菜の現在の保護者は高畑・T・タカミチ。明日菜とアキラの担任だった。

✂

第2話でわかったこと。

- 1、魔法使いの世界には空飛ぶホウキがある。
- 2、魔法使いは格差社会！
- 3、アキラの頭の中にはちっちゃな悪魔がいる。
- 4、魔法使いは二種類存在する。
- 5、アキラ達魔法使いは固有の魔法のみ使える。
- 6、明日菜はすでに魔法にかかっている？
- 7、魔法を解く力を持つ魔法使いは激レア！
- 8、嬉しそうなアキラはクソかわいい。

そして第3話でわかること。

それはまだ……………混沌の中。
それが……………ドロヘドロ！

魔の3

「高畑先生……」

明日菜はそう呟くと何か考えているのか暫く黙ったままだった。まさか高畑先生も魔法使い？ そんな考えが明日菜の頭の中にグルグルと回っているのだ。

そんな明日菜を見てか、アキラはこんな提案をした。

「とりあえずさ、麻帆良に戻る前に少し魔法使いの世界を観光してかない？ まだよく分かってないでしょう、コッチの世界のことは」

アキラはそう言いながら赤色のパーカーとマスクを差し出した。制服姿だと目立つよ、とアキラも差し出したパーカーの色違いを羽織った。ちなみにその色は青色でアキラにとっても似合っていたと明日菜は思った。

「ねえ、このウサミミの着いたガスマスクみたいな何なの？」

明日菜はずっと疑問に思っていたちよつと趣味の悪い魔法使いのマスクについて聞いてみた。

「このマスクは魔法使いの象徴だね。実力がある魔法使いは悪魔に作って貰ってるんだ。それぞれ個性的で良いマスクなんだよ」

笑顔で言うアキラはゴーグル付きのマスクを着けると、神楽坂さ

んも早く着けてみてと急かされた。

正直趣味が悪いと思っていた明日菜は何とも言えない顔で嫌々装着したのだった。

「……ツインテールとウサミミってバランス悪くない？」

そんな呟きはアキラには聞こえていないようで「似合ってる」「かわいい」などあまり嬉しくないことばかり言っていた。

ガスマスクにウサミミ。常人には理解できないセンスに明日菜は脱帽した。

辺りが暗くなり始めた外に出た2人はゆっくり歩きながら喋り始めた。

どうやら人間の世界と魔法使いの世界の時間の進みは同じようだった。

「アッチの魔法使いは一般人に魔法がバレたらオコジヨになるっていうバカバカしい刑があるらしいんだ」

「なにそれアホらし。コッチの魔法使いは何かやっちゃいけないタブーとかあるの？」

「ん、特に無いかな。その代わり治安は悪いかも」

「え、ちょっと今危ないんじゃないの!？」

辺りはもう暗い。治安が悪いという世界に女子中学生2人が歩いていたら危険ではないだろうか。

明日菜は途端に怖くなってアキラの腕にしがみついた。

「大丈夫だよ。私はこれでも名の知れてる家に生まれた魔法使いだね。ここら辺にいるゴロツキは襲って来ないよ」

そういえば親の七光りと先ほど言っていたのを思い出した明日菜は何となくアキラが頼もしく見えた。

アキラはどんな魔法を使うのだろう。明日菜は今までクラスではあまり喋らなかったアキラに興味を持ち始めた。

「アキラちゃんの魔法はドアを出す魔法なの？」

「ああ、あのドアは魔法使いの世界と人間の世界を繋ぐドアで魔法使いならみんな出せるよ。ただ魔力が無い魔法使いは出す場所は限定されてしまうけど」

アキラは明日菜に少し離れるように言つと手を広げた。

「私の魔法は物体を数秒間だけ消す魔法だ」

するとアキラの指先から煙が溢れ出した。

その煙を目の前にあつた木に当てると当たった部分だけが嘘のように綺麗に消え去った。

「コントロールが難しくて調子が良い時でさえ5秒間ぐらいしか持続しないんだ」

そう言う間に消えていた一部分の木は元に戻ってしまった。

人体にも有効だと言うアキラは自分の左手に煙を当てると見事に左手だけが消えていた。

「すぐに元に戻るとは言ってもあまり気分が良いものではないから

人にはやらないようにしてるよ」

「確かにちよつとグロいわね」

アキラの無くなった左手を見て明日菜は同感した。

明日菜はアキラの魔法を目の当たりにして改めて彼女は魔法使いなんだと認識した。

そして少し感動もした。魔法は本当にあるものなんだと。

「もし神楽坂さんも魔法使いだったら煙を出す管があるかもしれないね」

ニコニコしながらアキラは言う。

この話になるとアキラはやけにハイテンションになる。

普段クールな印象のアキラとは違うと明日菜は少しばかりげっそりした。

魔法は感動したが私は魔法使いじゃない！ そう叫びたかった。

今まで普通の生活してきたつもりで明日菜はいきなりアナタは魔法使い、しかも人間じゃない種族だと言われても受け入れたくない気持ちしか無い。

しかしアキラは同じ種族かもしれないと余りにも嬉しそうに言うものだから明日菜はハッキリ嫌だと意思表示できないのだ。

嗚呼、悲しきかな日本人の性。明日菜は日本人じゃないかもしれないが。

「神楽坂さん、アツチに戻ったら一緒に手がかり探そうね」

でも、アキラは一緒に記憶を取り戻そうと言ってくれる。そんなアキラと一緒にいるのは悪くないと明日菜は思った。

「ねえ、アキラちゃん。私のこと……神楽坂じゃなくて明日菜って呼んでよ。な、なんか苗字じゃ呼びづらいでしょ！ 長くて！」

「……うん。分かったよ、明日菜！」

種族とかそんなのは今はいいや。今はアキラと記憶を取り戻す方法を考えよう。

明日菜はそう思うと魔法使いの世界の夜を2人つきりで朝まで歩き回った。

✕

第3話でわかったこと。

- 1、マスクは魔法使いの象徴。
- 2、悪魔が作るマスクはアキラ曰わく、とってもハイセンス！
- 3、人間の世界と魔法使いの世界の時間の進みはおなじ。
- 4、大河内家は有名人？
- 5、魔法使いの世界は治安が悪い。
- 6、明日菜は意外と怖がり。でも精神的にタフ。

7、アキラの魔法はイマイチ？

8、明日菜とアキラは名前で呼び合う仲になった！

そして第4話でわかること。

それはまだ……混沌の中。

それが……ドロヘドロ！

魔の4

あの日、2人一緒に寮に帰ったのは朝方になった。

もちろん寮長にみっちり説教を喰らったがアキラは全然気にした様子はなかった。

アキラと少しの間だが2人つきりなつた明日菜はアキラのマイペースな性格を何となく分かってきた。

一方、明日菜はアキラとは違い、周りのクラスメートの噂を敏感に感じ取った。

「今まで接点の無かった2人が朝帰り！ スクープ！」やら「あーん、私のアキラが盗られてもうた！」やら「ウチと一緒に帰らなかったばかりにいつの間にか明日菜は遠くに行ってしまったんやえ」やらやらや。

明日菜は噂好きすぎるクラスメート達にウンザリした。

そして明日菜以上にウンザリしているのは長谷川千雨。彼女である。

「まったく、アホかつつのッ！」

そう呟く千雨の声は騒がしすぎるこのクラスには全く届かなかったのだった。

「大河内のヤツ、神楽坂のバカに魔法バラしやがったな」

そう言つと元々つり目の千雨の目は更に鋭い目つきになった。

千雨はアキラと同じ煙を出す魔法使いだがアキラと違い、名も無い家系に生まれた事もあつて煙を出す力が少なかった。

魔法使いの世界は格差社会。力の無い長谷川家は魔法使いの世界から比較的住みやすい真帆良に移住した。

しかし麻帆良の魔法使いは「煙を出す魔法使い」の事は良く思っていない。

もし移住してきたと知つたらすぐ追い出されるだろう。長谷川家は身を隠す事にした。

それからは普通の人間として代々「煙を出す魔法使い」という事実を隠して生活してきたのだった。

しかしここ数年、魔法使いの界限で有名な大河内家の者が麻帆良に移住してきたと聞いてから千雨はアキラを監視していた。

幸い、アキラは無名の長谷川家の事は全く知らず、千雨の事ももちろん知らなかった。

良かった、これで私達家族が「煙を出す魔法使い」というのはバレないだろう。千雨は安心した。

麻帆良の魔法使いにも大河内家是有名らしく学園長から移住の許可を貰つたとはいえ快く思わないヤツはいる。

そんなヤツから目の敵にされてる所為もあり益々長谷川家の魔法使いとしての名は薄くなつたのだ。

しかし、しかしだ。昨日、アキラを監視していた千雨は明日菜と一緒に魔法使いの世界に繋ぐドアに入っていくのを見てしまった！千雨は少しでも魔法使いとバレる可能性が出る事は避けたかったのだ。

「チクショー……、神楽坂が魔法使いの事を知つたら私の事がバレる可能性が高まるじゃねーか！」

煙を出す魔法使いは見た目は人間と全く変わらない。

しかし、血が人間とは違うのだ。煙を出す魔法使いは血に黒い粒子が混ざっている。

もし知っている人間が見たら一発でバレる！

千雨はそんなのは嫌だ！　と今日もアキラを監視したのだった。

✕

千雨の監視は下校まで続いた。明日菜とアキラは学校にいる間はそれぞれ今まで通り仲が良いメンバーと一緒にしていたが帰りになると朝の件もあって奇妙にクラスメートはよそよそしくなり2人で帰りなよ、2人つきりで、なんていらない気遣いをされていた。

アキラは気にしてはいなかったが明日菜は顔を真っ赤にさせてクラス中を睨んでいる。

アキラもアキラで「私と一緒に帰るのはイヤ？」と言うものだから明日菜はクラスメートに生暖かい声援を受けて一緒に帰る他なかった。

「百合の花咲かせてんじゃねエーよー！」

千雨は心の中で盛大に突っ込んだ。

こんな2人の下校風景まで見なきゃいけないのかよ、何の罰ゲームだよ、と千雨は今までのどんな尾行や監視より一番嫌な尾行になる事を覚悟した。

半ば尾行がヤケクソ気味になったところ、千雨は嫌な予感がした。明日菜とアキラが予想以上にイチャイチャ（ただの道草）してい

たため、辺りが暗くなってきたのだ。

魔法を出す煙の量が決定的に少ない千雨は勘だけは鋭かった。
今日は何て最悪な日だろう。

千雨の真後ろから魔力の香りがした。

「長谷川千雨か。貴様の血、少し分けて貰おう」

アッチの魔法使いの有名人、エヴァンジェリン・A・K・マクダ
ウエルだった。

「さよなら、私の平穏ライフ」

千雨は泣きたい気分を抑え、足を動かした。

ドアを出せばすぐに逃げられるがそうもいかない。600年は生
きたと言われるエヴァンジェリンにすぐ「煙を出す魔法使い」とい
うのはバレルだろう。

そしたらエヴァンジェリンと繋がっているだろう学園長にあつと
いう間に話が伝わってしまう。

「私の両親が代々守ってきた秘密だ。こんな事でバレてたまるか！」

しかし千雨は足が遅い。これでは捕まるのも時間の問題だった。

「逃げるという判断は早かったが逃げ足は遅いな、長谷川千雨！
生き血頂戴する！」

「うわぁぁぁぁー！」

千雨の悲鳴は尾行されていたアキラ達の耳にも届いた。

何事かと悲鳴の元に駆けつけるとそこには首筋から血を流す千雨と口元に血糊を付けたエヴァンジェリンがいた。

「……大河内アキラと神楽坂明日菜か。長谷川千雨の血はやけに美味かったぞ」

「えっ！ あっ！？ 長谷川っ！ 魔法使いだったのか！？」

アキラは長谷川の首筋から流れる血に黒い粒子が混じっているのを見逃さなかった。

✕

第4話でわかったこと。

- 1、2人は仲良く朝帰り！
- 2、長谷川千雨は静かに暮らしたい。
- 3、煙を出す魔法使いは嫌われ者。
- 4、アキラや千雨などの魔法使いの血には黒い粒子がある。
- 5、千雨は魔法使いとしての实力はあまりない。

6、女の勘は当たるのよ。

7、エヴァンジェリンは平常運転。

8、ばれちゃった。テヘ。

そして第5話でわかること。

それはまだ……混沌の中。

それが……ドロヘドロ！

魔の5

「長谷川！？ 魔法使いだったのか！？」

千雨の首筋から流れる血に黒い粒子が混じっているのを見たアキラは叫んだ。

「千雨ちゃんが！？」

明日菜もそれに続いた。

当の千雨は貧血のショックで腰は抜け、頭を上げるので精一杯だった。

「一気に3人にバレるなんてツイてねーよ……」

今までやってきた事は何だったのか、千雨は今度こそ本気で泣き止まなかった。

そして突然の乱入者が2人共千雨に注目しているため、エヴァンジェリンは無性に腹が立った。

元来目立ちたがり屋のエヴァンジェリンは自分が除け者扱いされるのは許されない事だった。

「ええい！ 貴様ら私の存在に気づけ！」

「あれっ、エヴァちゃん何やってんの？」

明日菜の天然で心に傷を負ったエヴァンジェリンは真祖と言われる威厳は全く無かった。エヴァンジェリンはこめかみに青筋を立て、顔を引きつかせながら懷に手をやった。

「うぐっ、貴様らもう許さん！ 私をコケにしようって」

出したのは魔法薬。学園結界のせいで全くと言っていいほど魔力が無いエヴァンジェリンは魔法薬を触媒にしなければ魔法が使えない状態である。

しかし彼女は600年生きた魔女だ。調合は完璧、威力は申し分無いハズだ。

「少しは痛い目に合うがいい」

「くっ！」

アキラは投げられた魔法薬に煙を放った。瓶が割れて魔法が発動する前に消ばいい。数秒後には元に戻るとはいつても避ける為には十分だった。

「煙だと！？ 大河内アキラ、貴様あちら側の魔法使いなのか！？」

「エヴァンジェリンさんこそ、アッチの魔法使いだったんだね」

対峙した2人はお互いの素性を知り心底驚いた。特にエヴァンジェリンは何故か目まで光らせて。

「煙を出す魔法使いは初めて見た！ ヤツらアッチの世界に引きこもってコッチには滅多に來ないもんだからな」

やけに興奮したエヴァンジェリンは鼻息を荒くして物珍しそうな眼差しでアキラを見つめる。

するとすぐ近くにしゃがみ込んでいる千雨を見てお前もなのか！
とはしゃぎ始めてしまった。

「なあ！ オマエら頭の中に小さい悪魔がいるんだろ！ ちょっと私に見せてみる！」

「バカ言ってンじゃねーよ！ 殺す気か！」

「じゃあ、マスクは！？ 何故してないんだ！」

「こつちでしてたら変人扱いだつーの！」

「長谷川！ 何言ってるんだ！ 悪魔が作ったマスクはハイセンスだぞ！」

「大河内まで話に入ってくんじゃねーよ！ クソっ、調子狂うぜ。」

煙を出す魔法使いに興味津々なエヴァンジェリンを見てさっきまでのブチ切れ寸前の空気はどこに行ったとウンザリな表情の千雨。

「いいかテメーら、私が魔法使いだって事は麻帆良の連中には黙ってろよ」

それを聞いたアキラは言う。

「何で今まで隠してたんだ？ 私と同郷じゃないか」

その言葉に千雨は鼻で笑った。

「ハッ。大河内、テメーは私とは違うんだ。テメーは代々有名な魔法使い一族のお嬢様。私は名も無く魔法も役に立たない魔法使い。そんな私は隠れて過ごすしかないんだ。もし麻帆良の連中に見つかったら大河内と違って防衛手段も無いもんな、ギッタギタにやられちまうよ」

「ちょっと待つてよ。何でアキラちゃんや千雨ちゃん、魔法使いはそんなにコツチの人達に嫌われてるのよ？」

明日菜はアキラからも以前、煙を出す魔法使いがコツチの魔法使いに目の敵にされている話を聞いたがなぜそこまで嫌われる理由は知らなかった。

そこで今まで黙って話を聞いていた興奮冷め止まぬエヴァンジェリンが口を開いた。

「煙を出す魔法使いは魔法の練習のために人間を練習台にするらしいな」

「そういう事だよ。大河内ももしかしたら神楽坂を練習台にするために手玉にとつてんのかもよ。なんせ大河内は今までこの話をしなかったんだからな」

くくつと顔を歪めて笑う千雨は皮肉たつぷりに言つてやった。

その言葉に縮こまつたアキラはもちろん明日菜を練習台にしようなどとは考えてはいなかったが煙を出す魔法使いの非道な行いを話せなかったのも事実だった。

千雨もアキラが明日菜を練習台になんてしない事は知っていた。今まで監視や尾行を続けていて、アキラの魔法がモノを消す力とい

つてもすぐに元に戻ってしまう事、明日菜に魔法が効かない事などを知っているので明日菜相手に魔法の練習なんて意味が無い事なのだ。

それでも言ったのは今日の憂さ晴らしといった所だろう。千雨の皮肉は真面目なアキラには効果覲面だった。

するとそんなアキラの肩に手を乗せた明日菜はビクリと肩を震わしたアキラに向かってニカツと笑って見せた。

「アキラちゃんはそんなことしないわよ！」

「明日菜……！」

そんな明日菜に釣られてアキラも笑った。

千雨は2人の様子を見て皮肉った自分が馬鹿らしく感じ、同時に2人が羨ましいと思った。

隠れながら生きてきた千雨は自分から壁を作り出しては他人を突っぱねてきた。そんな千雨にはもちろん友達という友達はいなかった。

しかし明日菜とアキラは短期間でここまでお互いに距離を縮め、明日菜はアキラを信用して笑ったのだ。

千雨はばつが悪くなってポツリと呟いた。

「……悪かったよ、冗談だ」

「オホンっ、茶番は済んだか？」

エヴァンジェリンがわざとらしく咳払いをすると千雨に向かってこう言った。

「長谷川千雨、麻帆良の連中に魔法使いとバラされなくなったら

私をオマエラの魔法使いの世界とやらに連れて行け」

「はあっ！？ 何だよ！？」

「私は昔悪魔に会った時があつてな、その悪魔は歌手でコッチの世界で時々コンサートを開いてるんだ。たまたま歌を聞いた私はその悪魔の大ファンになってしまったよ。MCで煙を出す魔法使いの話を聞いて以来アッチの魔法使いの世界に興味が湧いてだな、かくかくしかじか」

ああ、なるほど。だからエヴァンジェリンは煙を出す魔法使いにいらんロマンを感じているんだな、と3人は思った。

ついでに明日菜は悪魔がコンサート開いてMCまでやるってどんな悪魔よ、と未だ見た事がない悪魔を変に想像した。

「私は何百回とコンサートに行ったよ。行くうちにその悪魔からも認知されてしまつてな、何回か食事に行った事もある。その時にその悪魔が今までに会った事があるレアな力を持つ魔法使いの話を聞いたんだ」

ハッとした。エヴァンジェリンはここ麻帆良の地で何かしらの呪術にかかつて何十年も封印され続けられてるのを千雨は思い出した。そんなエヴァンジェリンが求めるものはただ一つ。

「魔法を解く力を持つ魔法使いの話をな」

✕

第5話でわかったこと。

1、エヴァンジェリンの吸血に千雨は腰砕け。

2、こつちでマスクは着けてると変人扱いされるみたい。

3、煙を出す魔法使いは人間を魔法の練習台にするヒドイやつら。

4、それでも明日菜とアキラは仲良し。

5、千雨はそんなに悪い子じゃない。

6、エヴァンジェリン、ジャイアニズムを発揮。

7、エヴァンジェリンは悪魔の大ファン。

8、魔法を解く力を持つ魔法使いを探せ！

そして第6話でわかること。

それはまだ……混沌の中。

それが……ドロヘドロ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0390v/>

ブラックユーモアダンス

2011年7月27日03時24分発行